

5-02 地域住民が抱く障害者イメージと支援意識に関する予備的調査

○佐野 恭子(OT), 清水 大輔(OT)

兵庫医療大学 リハビリテーション学部 作業療法学科

Key word : 地域, 障害者, イメージ

【背景】 地域共生社会の実現に向けて作業療法の果たす役割は大きく、特に障害者や高齢者とのつながり、助け合いに関する住民の意識を高めることは重要と考えられる。そのためにはまず、障害者や高齢者に対して地域住民がどんなイメージを持っているか知る必要がある。しかし、障害者イメージに関する調査研究は、医療系学生や大学生を対象にしたものが多い。

【目的】 本研究は、障害者が登場するドキュメンタリー映画の鑑賞を通して、地域住民が障害者に抱くイメージや支援意識の一端を知ることが目的で行った。本研究は兵庫医療大学倫理審査委員会を通じて学長の承認を得た(承認番号: 第19018号)。

【方法】

1. 時期と内容: 2019年9・11月の週末に計2回、本学が主催する地域交流プロジェクトの1つとして、ドキュメンタリー映画鑑賞会を企画・開催した。内容は、映画に関連する障害の小講義、映画鑑賞、アンケート調査とした。

2. 鑑賞した映画: 第1回では認知症を題材にした「幸せな時間(監督: 横山善太)」, 第2回では知的障害と自閉症を題材にした「ちづる(監督: 赤崎正和)」を上映した。両者とも関連領域での認知度が高く、障害像が分かりやすく描写されている。

3. 対象: 広告等を見て応募し、開始時に口頭で研究に関する説明を受けた後、同意の意思をアンケート用紙に記した地域住民(各回定員20名)とした。

4. アンケート: 選択式・記述式質問からなるアンケートを作成し、無記名で実施した。選択式質問では年齢、性別、障害者との接点や障害者イメージ等を、記述式質問では映画の感想や障害者への支援の意思等を問うた。障害者イメージの設問にはSemantic Differential法を用いて、星越活彦ら(1994)、松村孝雄ら(2002)等を参考に形容(動)詞対11対を作成し、5段階評定で回答を求めた。

【結果】

1. 参加者とアンケート提出者: 参加者・アンケート提出者ともに、第1回が11名(男性2名, 女性9名, 70歳代6名, 20歳代5名), 第2回が10名(同2名, 8名, 60-70歳代6名, 10-20歳代・40歳代各2名)であった。

2. アンケート回答: 2回の共通点は、障害者との接点や障害を学ぶ機会が「よくある」「時々ある」との回答が7割以上を、障害者に「複雑な」「難しい」とのイメージを持った者が約9割を占めたことであった。相違点は障害者イメージに関するもので、第1回では「穏やかな」「暖かい」「身近な」と答えた者が6割以上であったこと、第2回では6つの形容(動)詞対で5割以上が〈どちらでもない〉と答えたことであった(第1回は0対)。記述式質問の「登場人物が身近にいたら何ができると思うか」に対しては、第1回では「頼まれれば手伝いたい」「家族が孤立しないよう支えたい」「役割や人と関わる機会を提供したい」、第2回では「見守るしかできない」「何ができるか分からない」との回答が目立った。

【考察】 今後も同様の調査を重ねて信頼に足る情報量の蓄積に努める必要があるが、今回の参加者の大半が認知症者や知的障害を伴う自閉症者に対して“複雑”“難解”なイメージを抱いていたことから、地域住民の障害理解を促す働きかけについて検討する必要性はあると思われた。また、心理的距離や支援意識の面では、障害特性によって参加者の感じ方が異なる可能性も垣間見えた。作業療法士はその専門性を生かして、机上の知識だけではなく、今回のようなドキュメンタリー映画の鑑賞や障害者が参加する地域の行事等を通して、地域住民が障害者を身近な存在として感じられる具体的、実際の情報(例: 日々の暮らしぶり, 困りごと, 専門知識を要さない関わり方の基本)を継続して発信することができるのではないかと考えられた。